

フランス人民戦線政府論

平 田 好 成

日本では、フランス政治史研究が、ヨーロッパ政治史研究のうちで、ドイツやイギリスのそれにくらべて相対的におこなわれている。フランス近・現代政治史の具体的な研究は、フランス革命期の研究を除いて、最近ようやく内外で開始されはじめていっている。最近、フランス政治史に関する通史が、一、二発行されたが、個々の政治史現象についての説明はなお、今後に残された重要な研究課題であるということができよう。

フランス現代政治史、とくにフランス第三共和制政治史のうち、一九三〇年代のフランス人民戦線期に関する具体的な研究も、その重要な課題の一つにあげられる。現在、フランスでは、国家文書館 (Archives Nationales) におさめられている政府関係文書は、一九二〇年までの分が公開されている。一九二〇年代以降についてはまだ、個々に史料蒐集が行なわれ、個別的な研究成果が発表されているにすぎない。フランス現代政治史―人民戦線期―の総括的な研究は、まだ現われていないといっている。とくに、フランス人民戦線期を社会主義・労働運動の側面から多角的に研究しようとする試みは、最近よ

うやく本格化されようとしているにすぎない。フランス人民戦線政治史の研究は、日本の戦後政治史との比較政治史的研究に大きな示唆をあたえるという意味で、重要な意義をもっている。

戦後、日本のそれをもふくめて、ファシズムに関する研究は、政治学会や歴史学会等でかなりの量にのぼり、最近はその後発掘された新しい史料に基づいて、より多角的な研究がすすめられている。他方、反ファシズムに関する研究は、戦前の日本にその経験が皆無に近かったせいもあって、きわめて微々たる状況である。本来、ファシズム研究は、そのアンティ・テーゼたる反ファシズム研究と交差して行なわれなければ、けっしてじゅうぶんなものとはいえないであろう。ヨーロッパ政治史に関しても、最近ようやく、フランス、スペインをはじめ、イタリア、ドイツ、イギリスなどにおける反ファシズム研究がその兆しをみせはじめている。そのなかで、国際的価値がきわめてたかいとされている、フランス人民戦線政治史の解明は、じゅうぶんな研究に価する意義と価値とをもっている。多種多様な社会層の参加した一九三〇年代のフランス人民戦線政治史の研究は、たんにフランス現代政治史のユニークな一齣であるばかりでなく、戦後日本の民衆運動、とくに社会主義・労働運動史の解明にとって、大きな教訓史として活きている。フランス人民戦線に参加した政党、労働組合その他の圧力団体レヴェルのリーダーシップの解明はもちろん、それらリーダーシップとその運動の社会的構造との全体的な関連（最近のフランス史学における社会史・社会運動史的研究方法など）を明確にして、その全体像を解明することが必要である。

一九三〇年代のフランス人民戦線は、フランスでファシズム体制が確立するのを一時阻止した。フランス人民戦線は、ファシズムと戦争の論理に、民主主義と平和の論理を対峙させた。フランス人民戦線は、ファシズムと反動と戦争の脅威にたいする防衛の戦術のうちに、攻撃の戦術を内包していた。コミンテルン第七回大会は、フランス人民戦線戦術の経験をバックにして、それを国際的戦術にたかめた。しかし、フランス人民戦線は、固有の弱点をもっていた。それらの弱点は、一九三〇年代という歴史的制約条件のもとで追求されなければならないであろう。フランス人民戦線は、政党・階級・大衆の下

部レヴェルにじゅうぶん根づかなかつた。フランス人民戦線は、各企業や各地域で、民主的に選ばれた人民戦線委員会の広範なまとまりを欠いていた。フランス人民戦線は、最初に人民戦線政府への共産党閣僚の参加を欠いていた。フランス人民戦線は、大銀行とトラストの経済的、金融的サポーターにたいするじゅうぶんな反撃手段を欠いていた。^(三)

本稿は、フランス人民戦線政府に関するいくつかの問題点を解明する。

一 コミンテルン第七回大会と人民戦線政府論

デIMITロフは、コミンテルン第七回大会の報告のなかで、フランスの統一戦線の中心問題を詳細に論じ、その最後の部分で、つぎのように述べた。

「そして、もしフランスで反ファシズム運動が、フランスのファシズムにたいする真の闘争—言葉のうえだけでなく、行動による闘争—を実現し、反ファシズム人民戦線の諸要求の綱領を実行する政府をつくるところまで到達するならば、共産主義者は、あらゆるブルジョア政府の非妥協的な敵であり、ソヴェト権力の味方であることをやめないにもかかわらず、増大するファシズムの危険をまえにして、そのような政府を支持するにやぶさかではないであろう。(拍手)」^(四)

デIMITロフは、統一戦線政府について、つぎのように述べた。

「もしも、われわれ共産主義者は、部分的な要求のための闘争にかぎって統一戦線を足場とするのか、それとも、統一戦線をもとにして政府をつくることになったばあいにも責任を分担する用意があるのか、と尋ねる者があるならば、われわれは、完全に責任を自覚しつつこの言う—そうだ、われわれは、プロレタリア統一戦線政府または反ファシズム人民戦線政府の樹立が可能となるだけでなく、プロレタリアートの利益のために必要ともなるような状態が生じることありうることを考慮している(拍手)、そして、そのばあい、われわれはなんらの躊躇なくそうした政府の樹立に賛成する、と。」^(五)

統一戦線政府または人民戦線政府は、プロレタリア革命が勝利したのちにつくられる政府ではなかつた。統一戦線政府ま

たは人民戦線政府は、ソヴェト革命の前夜に、まだプロレタリア革命が勝利をおさめていないときにつくられる可能性があった。統一戦線政府の性格について、デミトロフは、つぎのようにのべた。

「それはいったいどんな政府か？ またどんな情勢のもとでそういう政府が問題となりうるのか？

それはまず第一に、ファシズムと反動にたいして闘争する政府である。それは、統一戦線運動の結果として成立した政府、そして、共産党と労働者階級の大衆組織の活動をけつして制限せず、反対に、反革命的な金融界の巨頭とその手先であるファシストにたいし断固たる措置をとる政府でなければならない。

その国の共産党は、適切な時機に、盛りあがる統一戦線運動を足場として、一定の反ファシズム綱領にもとづくそのような政府をつくることを主張するであらう。^(六)

デミトロフは、統一戦線政府の成立の可能性を予測し、その客観的条件および三つの特殊な前提条件を、ごく一般的な形で、つぎのようにのべた。

「そのような政府の形成は、どんな客観的条件のもとで可能となるか？ この問にたいしてはごく、一般的な形でつぎのように答えることができる。支配階級が大衆的反ファシズム運動の力づよい高揚をもちやおさえることができなくなった政治的危機の条件下において、と。しかしこれは、それなしには統一戦線政府の形成が実際にはほとんど不可能だという意味での一般的な見通しにすぎない。この政府をつくる問題を政治的に必須の任務として日程にのぼせることができるのは、一定の特殊の前提条件が存在するばかりにすぎない。そのさいもつとも注意しなければならないのは、つぎのような前提条件であらうと思われる。

第一に、ブルジョアジーの国家機関がすでに十分解体と麻痺の状態にあり、その結果ブルジョアジーが反動とファシズムにたいする闘争の政府をつくることを妨害しえなくなっていること。

第二に、きわめて広範な勤労大衆、とくに大衆的労働組合が、ファシズムと反動にたいしてはげしく反抗はするが、共産党の指導下にソヴェト権力獲得のためにたたかおうとして、蜂起に立ちあがる用意はまだできていない状態にあること。

第三に、統一戦線に参加している社会民主党その他の政党の隊列内の分化と左翼化が進み、その相当部分がすでにファシストおよびその他の反動分子にたいする仮借ない処置を要求し、共産主義とともにファシズムに反対してたたき、自分の属する政党のなかで共産主義に敵意をいなく反動的な部分にたいして公然と反対するようになっていくこと。

これらの前提条件が十分にそなわっているような状態が実際にいつどの国に訪れるかを予言することはできない。しかし、そのような可能性はどの資本主義国にもありうるだけに、われわれはこの可能性を計算に入れ、われわれ自身その方向をめざし、その準備をととのえるだけでなく、労働者階級にも適切な方向づけをあたえるのでなければならぬ。」^(七)

一九二二年のコミンテルン第四回大会および一九二四年のコミンテルン第五回大会は、統一戦線戦術に基づく過渡的政府たる労働者政府もしくは労働者農民政府の可能性の問題を討議した。第四回大会における労働者政府に関するテーゼは、この政府のもっとも重要な任務を「プロレタリアートを武装し、ブルジョアの反革命組織を武装解除し、生産管理を導入し、主な課税負担を富裕者に転嫁し、反革命的ブルジョアジーの抵抗をうちやぶる」ことにもとめた。第五回大会における労働者政府に関する決議は、第四回大会のテーゼとくらべて、大きな断絶をみることができた。それは、レーニン型統一戦線とスターリン型統一戦線の断絶であった。第五回大会の決議は、「コミンテルンにとって、労働者農民政府のスローガンは大衆の用語、革命の用語に翻訳されたプロレタリアート独裁のスローガンである。ロシア革命の経験からひきだされた労働者農民政府の方式は、ブルジョアジーの革命的打倒とソヴェト権力の樹立のための扇動と大衆動員方法以外のなにもでもなかったし、またありえない。」^(九)とのべていた。第五回大会の決議のでべられた労働者農民政府は、第四回大会で予想された五つの政府形態の最後の型、すなわち、純粹のプロレタリアの労働者政府(ソヴェト政府)と一元的なものとして解釈された。ディミトロフは、第七回大会報告で、つぎのようにのべた。

「われわれが今日この問題を全面的に討議にのぼせていることは、いうまでもなく、われわれの情勢判断および近い将来の発展の見通し

とむすびついており、また最近一連の国における統一戦線運動の実際の成長ともむすびついていて、一〇年あまりのあいだ、資本主義諸国の情勢は、共産主義インタナショナルとしてこの種の問題を討議する必要のないような状態であった。

同志諸君、諸君も記憶しておられるように、一九二三年のわれわれの第四回大会と、さらに一九二四年の第五回大会でも、労働者政府あるいは労働者農民政府のスローガンの問題が討議された。そのさいははじめ問題となつたのは、本質的にはわれわれが今日提起しているのとほとんど同じ問題であった。^(一)

デIMITロフは、一九三五年半ばに予想される統一戦線政府または人民戦線政府を、一九二二年に論議された労働者政府もしくはその発展としての労働者農民政府のスローガンと直結させた。^(二)しかし、デIMITロフの報告は、一九二〇年代初期と一九三〇年代半ばの客観情勢のいちじるしい変化や、とくに、第四回大会と第五回大会における労働者農民政府のスローガンの性格づけの転換などについて、明確な言及を避けていた。第五回大会で決議された労働者農民政府は、第七回大会で提起された統一戦線政府と明らかに切斷された内容のものであった。

デIMITロフは、報告のなかで、一九二〇年代初期、労働者政府の問題をめぐるコミンテルン内に生じた、右翼日和見主義と左翼セクト主義の偏向の危険性から、いくつかの教訓をひきだした。誤りの第一の系列は、労働者政府の問題が、政治的危機の存在と明確に結合されていなかったためにおこつた。誤りの第二の系列は、労働者政府の問題が、プロレタリアートの戦闘的な大衆的統一戦線運動の発展と結合されていなかったためにおこつた。誤りの第三の系列は、労働者政府の実際の政策に関しておこつた。その例証は、一九二三年のザクセンとチューリンゲンの労働者政府であつた。^(三)

デIMITロフは、統一戦線政府について、レーニン型統一戦線的アプローチを復活させた。

『同志諸君、われわれはどの統一戦線政府にたいしてもまったく別の政策を要求する。われわれは、統一戦線政府が情勢に適合した一定の根本的な革命的要求、たとえば生産の統制、銀行の統制、警察の解散、警察に代わる労働者の武装民兵の設置、等々を實行することを要求する。』

レーニンは、一五年前、「プロレタリア革命への移行あるいは接近の形態を探します」ことにあらゆる注意を集中せよ、とわれわれによびかけた。おそらく統一戦線政府は、一連の国でもっとも重要な移行形態の一つとなるだろう。」^(二四)

第七回大会は、過渡的スローガンとして、統一戦線政府もしくは人民戦線政府を大胆に構想した。プロレタリア統一戦線政府もしくは反ファシズム人民戦線政府は、一九三〇年代のファシズムと反動と戦争の脅威に反撃をくわえることを主要な任務としており、その階級的内容と役割は、労働者農民政府のそれよりもずっと広大で多彩なものであった。デIMITロフは、討論への結語のなかで、つぎのようにのべた。

「現実には、どんな図式よりもずっと複雑である。たとえば、統一戦線政府はプロレタリア独裁樹立途上の不可欠の段階であるかのような物の言い方をするのは、まちがいである。

「問題の核心は、決定的な瞬間にプロレタリアート自身が直接にブルジョアジーを打倒し、自階級の権力を樹立するそなえがあるか、そしてそのばあい同盟者の支持を確保することができるか、それともプロレタリア統一戦線と反ファシズム人民戦線の運動が、この段階では、直接ブルジョアジーの独裁を一掃することにならないで、ただファシズムをおしつぶしあるいは打倒するだけの状態にとどまるか、ということに帰着する。」^(二五)

第七回大会は、統一戦線政府をふくめて、新しい反ファシズム戦術を編みだした。しかし、第七回大会のバックにある革命戦略は、ソヴェト方式による社会主義革命であった。民主主義・社会主義革命という新しい革命戦略は、その後展開される革命的大衆運動のいっそうの発展を必要としていた。^(二六) 統一戦線政府とソヴェト政府との具体的な架橋計画は、第七回大会ではまだじゅうぶんな設計が行なわれない段階であった。デIMITロフは、明白に、つぎのようにのべている。

「だからわれわれは、政治的危機の条件のもとで反ファシズム統一戦線政府をつくるのが可能だと想定するのである。そうした政府が真に人民の敵にたいする闘争を遂行し、労働者階級と共産党に行動の自由をあたえるかぎり、われわれ共産主義者は、極力これを支持し、革命の一兵卒として最前線にあつて奮闘するであろう。だがわれわれは、大衆にむかつて率直にこう言う―この政府は最終的な救いをもた

らすことはできない。この政府は、搾取者の階級的支配を倒す力をもたない、だからファシスト反革命の危険を最終的に排除することもできない。したがって、社会主義革命の準備をすすめる必要がある。救いをもたらすのは、ただただソヴェト権力のみである!」^(一七)

デイミトロフは最後に、共産主義者の統一戦線政府入閣問題に関して、討論への結語で、つぎのようにのべた。

「私がすでに報告のなかで指摘したように、統一戦線政府が真に人民の敵とたたかい、共産党と労働者階級に活動の自由をあたえるかぎり、共産主義者はこの政府を全力をあげて支持するであろう。だが共産主義者が政府に参加するかどうかという問題は、もっぱら具体的情勢にかかっている。この種の問題は、それぞれ個々のばあいについて決定されるであろう。ここでできあいの処方箋をまえて出しておくことはできない。」^(一八)

二 フランス共産党と人民戦線政府論

フランス共産党のリーダーシップは、反ファシズム人民戦線政府にたいして、どういう態度をとったかが、このパラグラフにおける論点の一つである。

フランス共産党は、当初、社会党政府が出現することを予測できず、急進党政府が出現するであろうと予期していた。^(一九)フランス共産党は、一九三六年五月、レオン・ブルム(Léon Blum)による人民戦線政府へのたつての参加要請を拒否する決定を行なった。フランス共産党は、入閣によって、中産階級や中央派メンバーに、恐怖心をおこさせる危険をおかすことをぞまなかつた。フランス共産党はさらに、入閣を拒否することによって、社会党員が大きな不安に陥るはずだということを正確に察知していた。統一戦線政府に参加する問題は、フランス共産党にとつて、歴史上はじめて提起された問題であった。トレーズは、コミンテルン第七回大会での演説のなかで、つぎのようにのべた。

「反対に、革命的危機が生じ深刻化してゆくような諸条件のなかで、もしも共産党が、△ブルジョアジーの政治的経済的勢力をより以上にゆり動かすことができ、労働者階級の力を増大させることのできる▽暫定的な性格をもった最小限の方策を発表し、宣伝し、大衆に拮げ、

適当な時期に受けいれさせるならば、その時には、大衆運動の圧力は人民戦線政府の出現を必然的なものとすることができる。わが党はこの政府を支持するであろう、そして、もしもの時には、これに参加することさえもできるであろう。

反ファシズムの闘争は、なお一層苛酷になるであろう。なぜなら、反動とファシストの攻撃が残忍で直接的になるからである。だが、人民戦線と共産党は、新しい立場を占めるであろう。われわれはその立場を、ソヴェト権力の建設、プロレタリアート独裁の樹立を準備するために、利用しなければならない。⁽¹⁰⁾

このコミンテルン第七回大会の活動に関する批判的な研究は、まだ体系化されていない。その研究は、当時の西ヨーロッパ諸国における共産党の行動様式を理解するのに肝心かなめのものである。第七回大会で重要な役割を演じた政治思想は、依然として漠然としており、試行錯誤的でした。⁽¹¹⁾

ディミトロフは、前述したように、第七回大会の報告のなかで、ソヴェト革命の前夜に、まだ革命が勝利をおさめていないときに、統一戦線政府がつくられることもありうるのとべた。トレーズは、一九三五年一〇月一七日、共産党中央委員会報告のなかで、つぎのように説明した。

「われわれは、われわれが考えているような政府を何時でもはつくらないであろう。われわれは、諸条件がすでに革命的情勢をつくる時に、その政府をつくるであろう。すなわち、労働者階級がまだブルジョアジーにたいする最後の攻撃をする準備ができていない時、労働者階級がまだソヴェト権力およびプロレタリアート独裁のスローガンのもとで闘争をする準備ができていない時、しかし労働者階級や人民の広範な階層がファシストの企てに力でもって対決をする決心ができていない時、すなわちその結果、言葉の上ではなく実生活の上で真の革命情勢がつくられている時に、その政府をつくるであろう。⁽¹²⁾」

人民戦線がプロレタリア革命へ通ずるのは、単に可能性の問題であった。フランス共産党員の任務は、この可能性の方向に前進することであった。フランス共産党は、人民戦線政府の性格に関して、どのような基本的思想をもっていたのであろうか。人民戦線の局面は、権力獲得の局面のはるか上流に位置していた。同様に、人民戦線政府は、一九二〇年代の労働者

農民政府との関係ではちよつと引っこんだところに位置づけられていた。^(二三) トレーズは、一九二六年六月、フランス共産党第五回大会で、つぎのようにのべた。

「われわれが労働者農民政府という場合、われわれは国民議会の多数派に依拠するカシャン・ブルム内閣のことをいおうとは思わない。われわれは、古いブルジョア機関を破壊し、労働組合、工場評議会、その他の組織に依拠し、労働者大衆を訓練するプロレタリアートによる権力の行使をいおうと思つてゐる。労働者農民政府、それはプロレタリアート独裁のことである。」^(二四)

ここには、コミンテルン第五回大会で定義された、労働者農民政府の考え方の一義的な踏襲がみられた。反ファシズム人民戦線政府は、プロレタリアート独裁の政府ではなかった。人民戦線政府は、厳格な意味での革命政府ではなかった。人民戦線政府は、事態を一步革命の方向に前進させる可能性をもつた政府形態にすぎなかった。トレーズは、一九三六年一月、フランス共産党第八回大会で、デIMITROFが一般的な形で提起した統一戦線政府を、フランスの当時の客観情勢を斟酌したうえで、つぎのようにのべた。

「恐慌が深まり、ブルジョアジーが一般的に麻痺してしまい、大衆の行動が革命的に発展しているという状況のもとで、人民戦線政府は、武装団体を武装解除し、それらを有効な方法で解散させて、ファシズムの脅威をなくす政府であろう。金持に払わせて、大銀行の独裁に終止符をうつ政府であろう。また、この二つの任務をやりとげるために、大衆の議会外での行動と人民戦線委員会の組織とに依拠する政府であろう。この政府は、労働者階級とその党である共産党にたいして、扇動、宣伝、組織、活動のいっさいの自由をあたえる政府であろう。そして、労働者階級が権力を完全に獲得する準備をするのを、可能にするような政府であろう。」^(二五)

トレーズの人民戦線政府についての考え方には、つねに伏線が存在していた。トレーズは、一九三五年末から一九三六年初めの冬期をつうじて、真の (véritable) 人民戦線政府という発想のもとで、その政府のユニークな政策をえがきはじめた。トレーズは、一九三六年一月三〇日、ワグラム広間で発表した演説のなかで、つぎのようにのべた。

「われわれがつくろうと準備している政府は、また、われわれが統一戦線の強化と人民戦線委員会の組織をつうじて準備する政府は、他

の条件があたえられる場合、真の人民戦線政府である。この政府は、金持に支払わせる政府であり、ファシズムの脅威に決定的に終止符をうつ政府であり、そして、私はそれをくりかえしたいが、労働者農民政府の序曲となり、ソヴェト権力の創設、プロレタリアート独裁および社会主義革命の準備となるであろう政府である。しかし、この政府が実現する条件は、まだ現われていない。」^(二六)

トレーズはすでに、一九三五年末、ワグラム広間で発表した演説のなかで、人民戦線政府を「要するに、プロレタリアート独裁のための武装蜂起の序曲となる政府」と規定した。トレーズをはじめフランス共産党のリーダーシップは、真の人民戦線政府を想定して、この政府こそ、デIMITロフが定式化した統一戦線政府のフランス版であると考え、この政府は、プロレタリア革命の前夜にきわめて近接して誕生するであろうと想定した。その発想には、コミンテルン第五回大会以降に顕著になったスターリン型統一戦線の思考様式の根強い痕跡をみることができた。

フランス共産党員は、当時、非ソヴェト的政府には参加しないということを、依然として原則的な課題としていた。前述したように、フランス共産党員は、一九三六年五月、レオン・ブルム人民戦線政府には参加しないことを機関決定した。フランス共産党員は、レオン・ブルム人民戦線政府の性格が、真の人民戦線政府について抱いていた性格に照応していなかったために、参加することを躊躇した。政府への参加は、新ミルラン主義として断罪された。トレーズは「左翼政府」と「人民戦線政府」、それに「真の人民戦線政府」とを峻別して理解していた。トレーズは、デIMITロフと同じ論調で、第七回大会での報告のなかで、つぎのようにのべた。

「新しい問題が、わが党のまえに提起されようとしている。統一戦線政府か、あるいは反ファシズム人民戦線政府の出現かという問題である。

勿論、一九二三年のザクセン州におけるブランドラー内閣に似たような、議会的結合は問題とはなりえないであろう。われわれが、イギリスあるいはスカンジナビヤ諸国において経験したか、あるいは現に経験しているような、労働者政府も問題ではない。まして、ベルギー、チェコスロヴァキア、スペインにおける、社会党が参加したか、あるいは現に参加している政府のような、連立政府はなおさら問

題にならない。ブルジョアジーの事業を管理することが問題なのではない。大衆の圧力に依拠し、議會を超えた行動に依拠して、ファシズムと闘争し、いかなる犠牲を払っても、ファシズムが権力につく道を妨げることが問題なのである。」^(三〇)

フランス共産党員は、左翼政府が労働者の利益、自由の擁護および平和の維持に合致する政策を実行すれば、その政府に全面的な支持をあたえたであろう。^(三一)しかし、フランス共産党員が、この左翼政府に参加することは全然問題にもならなかった。トレーズは、フランス共産党第八回大会で、つぎのようにのべている。

「人民戦線戦術は、われわれを閣内協力というありふれた政策に導くにちがいないと言っている人たちにたいしては、われわれは、はっきりと次のように答えよう。

われわれはブルジョアジーの政党ではない。われわれは労働者階級の政党である。われわれは、いまだかつて、いかなる形であれ、ブルジョア政府に参加すると約束したことはなかった。われわれがこれまで言ってきたのは、次のことである——われわれがけっして空約束をしないということは、今までも、われわれの行動が示してきたし、これからもそうであろう——すなわち、

われわれはフランを立ちなおらせ、投機を強力におさえ、勤労大衆の利益を守り、民主的自由を擁護して、ファシスト団体の武装解除と解散をおこない、平和を維持することができるようなあらゆる措置を、議會内においても、議會外においても、支持する用意があるということである。

これを言いかえれば、われわれの考えるような人民戦線政府が、状況によって作ることができないあいだは、われわれは、フランス人民の利益と意志に合致する綱領を実現する左翼政府を、われわれの投票で支持するということをはっきりときめている。」^(三二)

デュクロは、一九三五年一月二日、パリ地区の共産党員と社会党員向けの情報会議で、つぎのような説明をおこなっている。

「共産党員が人民戦線政府についていう場合、この政府はもちろん不可避の段階ではないのだが、ブルジョアジーが抑制できないほど大衆の革命的圧力が高まっている政治的危機の情況のなかで創設される政府が問題なのである。議会的性格で参加する政府は全然問題になら

ないということをよく考えてもらいたい。ファシズムと反動にたいして激しく闘争をおこない、まだプロレタリアート独裁の政府ではないが、いわばその序曲となる可能性のある政府が問題なのである。われわれは、たとえその政府が人民戦線政府という名称をつけていたとしても、議会政府へのすべての参加をはっきり拒否する。^(三三)

また、一九三六年二月一日、フランス共産党が社会党の臨時大会にあてた書簡は、はっきりと、つぎのように主張している。

「われわれは、われわれの側としてはすべての内閣への参加を拒否するということを、ぜひとも宣言したいと思う。実際にその多くの実例は、内閣への参加が労働者階級にあらゆる害悪をほどこしうることを証明してきた。……共産主義インタナショナル第七回大会の決定にしたがって、われわれは、ブルジョアジーの勢力の崩壊、大衆の革命運動の激しい高揚という条件で、またプロレタリア権力への準備として、政府へのプロレタリア政協の協力の可能性を考えている。われわれは現在こういう状況にいないということをつけくわえる必要はない。人民戦線政府と名づけられていても、政府へのあらゆる参加は、ミルラン主義の再版でしかないであろう。」^(三四)

トレーズは、一九三六年四月と五月の総選挙において人民戦線派が勝利をおさめた直後の五月六日、内外の新聞社のレセプションの席で、つぎのように宣告した。

「われわれは、政府に参加しないであろう。われわれは、われわれの選挙運動をつうじて、非常に誠実にそういつてきたし、そのことをくりかえしてきた。」^(三五)

フランス共産党政治局は、レオン・ブルム政府を前述した「真の人民戦線政府」ではないと判断して、党員を閣内に送りこまない決定をおこなった。フランス共産党は、ブルムの再三にわたる入閣要請にたいして、拒否の態度をとりつづけた。

しかし、一九三六年五月、六月と人民戦線運動が異常な高揚をしはじめると、ブルム人民戦線政府参加の問題をめぐって、トレーズと政治局メンバーとの間に微妙な意見の齟齬がうまはれはじめた。トレーズは、レオン・ブルムによる政府参加の申し込みを受諾する考えに傾きはじめていた。トレーズは、一九六〇年に再版した『人民の子』のなかで、つぎの箇所を新たに加筆した。

「政府の問題が提起されていた。人民戦線の勝利と、選挙でのわれわれ自身の成功とに反映されていた大衆の圧力を目のまえにみて、わたしは、わが党が大胆さを発揮し、たんに議会支持の政策にとどまらずに、将来のブルム内閣にわが党の人間を送りこむという考えを発表した。ところが政治局はこれとはちがう意見をもっていた。」(三六)

トレーズは、個人的に政府へのフランス共産党の参加という考えを主張しはじめた。政治局のその他のメンバーは、トレーズの考えに反対であった。政治局で何時この問題が審議されたかということは、不明である。デュクロは、政治局では、この問題について全然討論が行なわれなかったことを明らかにしている。政治局では、この問題は、コミンテルン第七回大会の決定以降、一刀両断的に解決済みの問題であるように考えられていた。デュクロは、ヴィラール (Claude Willard) とのインタヴューのなかで、つぎのようにのべている。

「人民戦線政府の設立に先立つ時期をつうじて、レオン・ブルムはわが党にこの政府の設立に参加するように提案した。それこそ、わが党の前に提起された新しい問題であったし、その重大性がわが党のどの指導者からもまぬがれない返答をあたえなければならなかった新しい問題であった。

共産主義インタナショナル第七回大会は、共産党員が人民戦線政府に参加することがおこりうることを予見したが、そのような参加をうけいれるために考えられた条件は、いろいろな評価の対象になることができた。

共産主義インタナショナル第七回大会の期間中に、モーリス・トレーズは、『党は、人民戦線政府にたいしてその全勢力を投入し、場合によってはその人間をふくめて、その全手段をあたえるであろう』と宣言した。

実際この精神で、トレーズは、人民戦線政府の設立の前夜の情勢を分析した。トレーズは、参加の支持者であったが、政治局の内部にはためらいがあった。多くの同志たちは、疑いと留保を表明した。そして、私はといえば、私はためらっていたので、モーリス・トレーズの見解を支持しなかった。もし、私が説得させられていたら、私は支持していたであろう。政治局のメンバーの間に現われていたこの疑いとこのためらいのために、モーリス・トレーズの提案は票決に付されなかった。

私はもちろん、われわれがモーリス・トレーズについてゆかなかったことはまちがっていたことをやがて理解した。……

「その後で、わが党と政府の間に接触がつくられた。その接触は、われわれ、すなわち、モーリス・トレーズと私が毎週水曜日の午前中に、ブルボンの河岸にあるレオン・ブルムの家を訪問することで行なわれた。

われわれは、レオン・ブルムと現在の問題を検討し、その必要がある時は、政府のいくつかの態度を批判し、いくつかの提案を行なった。しかし、われわれは外部にいた。もしわれわれが内部に、すなわち、政府の内側にいたとしたら、われわれの発言はもっと大きな意味をもっていたであろう。」^(三七)

デュクロはさらに、モーリス・トレーズ研究所が一九六六年一〇月下旬にイヴリー市で開催した『一九三六年の人民戦線とモーリス・トレーズの行動』(Le Front Populaire de 1936 et l'Action de Maurice Thorez. Paris-Ivry, 24 au 29 Octobre 1966.) に関する国際科学会議の第三会期の報告のなかで、この入閣問題の経緯について、やや詳細に、つぎのようにならべている。

「レオン・ブルムの主宰する人民戦線政府は、共産党員が参加しないで六月四日に創設された。

実際に、レオン・ブルムによつて主宰される政府にわが党が参加するという提案にたいして、政治局は、一九三六年五月一四日につきのようになら答えた。

『われわれは、選挙運動の期間中、わが党は政府に参加しないであろうということを非常に誠実に示したいと熱望してきた。

『われわれは、共産党員が、内閣に席を占めることによつて、人民の敵たちの恐怖と狂気の運動に口実をあたえるよりもむしろ、社会党の指揮する政府を、誠実に、留保条件なしにそして包み隠さずに支持することによつて、人民の利益によりよく奉仕できるであろうと確信していた。』

この政治局の決定は、政府への参加に好意的であったモーリス・トレーズ同志の意見に反対して採択された。トレーズ同志は、大衆運動の高揚やわが党の選挙での勝利を前にして、われわれはもっと大胆になり、政府へ参加することを受け入れなければならないという考え方

を擁護した。

モーリス・トレーズの見解は、政治局によって受けつけられなかった。そして、私はといえば、私はその後、彼の提案を支持しなかったことを後悔した。

われわれが政府に参加することを拒否したことは、人民戦線側の有権者の大部分から、われわれの方からわれわれに降りかかった責任をとることを拒否したものと考えられた。

われわれが参加を拒否したことは、数人の者の目には、人民戦線綱領の実現の前に、わが党の利益をしばませる方向に向かう術策的な活動のようにみえた。大衆は、前進するために皆いっしょに進まなければならないという印象をもっていた。そして、ある人々は、わが党が他の政党といっしょに進むことよりも、自分の計算で得点をつけることに没頭しすぎたと考えた。

しかしながら、そのことは全然現実に対応していない。なぜなら、どの政党も人民戦線綱領の実現に努力するのにわれわれと同じ努力を發揮しなかったからである。だが、われわれが政府に参加することを拒否したことは、わが党については若干の制約をひきおこしたことに変わりはない。

そして、われわれは、共産党員が政府の内部に席を占めていたら、われわれ、すなわち、モーリス・トレーズと私自身が、ブルボンの海岸にあるレオン・ブルムの自宅でもった毎週の会合よりも、ずっと効果的に、政府の活動にたいして有効に影響力をあたえる結果になったであろうと考えることができる。

この最初の政府への参加の拒否ののち、人民戦線諸政府へ参加するためにわが党によって行なわれたその後の提案は、われわれのパートナーによって一度も受けいれられなかったということに注目しておく必要がある。^(三八)

コミンテルンは、一九三六年半ばごろから数カ月間、共産党の人民戦線政府への参加問題を再検討した。コミンテルン指導部は、一九三六年九月、資本主義世界ではじめて、スペイン共産党員がカバリェロ政府に入閣することを許可した。フランスの場合にはためらいをしめしたデュクロが、スペインの場合には、はっきり賛成の意志表示を行なった。デュクロは、

一九三〇年代のスペイン共産党側のコミンテルン代表委員であった。デュクロは、当時の状況を、つぎのように回想している。「一九三六年八月、ラルゴ・カバリエロが政府を形成することを委託されている時に私はスペインにいたが、私はこの政府に共産党員が入関することが起りうるかということについて、私の意見をのべるようにもとめられた。そして、私は参加することに賛成した。

私はすでに、フランスで起ったことおよび起っていることからいくつかの教訓を引きだした。そして、それはブルム政府の形成後三ヵ月経っていた。結局、二人の共産党閣僚が、ラルゴ・カバリエロ政府に入関した。カバリエロは、私が完全に意見が一致したスペインの同志たちによって有利だと考えられた、彼の内閣へのこの参加をはっきりと熱望していた。^(三九)

スペインの経験は、フランスに微妙な反映をした。一九三七年の春、および一九三八年一月に第二次ブルム人民戦線政府が形成されようとしていたときに、フランス共産党員は、コミンテルンの勧告に基づいて、連立に参加する用意があることをはっきりと意志表示した。^(四〇) フランス共産党は、国内レヴェルでは一九三六年の六月の「社会的爆発」が、国際レヴェルではスペイン戦争の勃発が、デミトロフが第七回大会でのべた「政治的危機」という条件を完全に明るみに出したために、政府参加の意志を表明した。フランス共産党は、この二つの大きな事件が、「左翼政府」と「人民戦線政府」との間の深い溝を埋めたものと評価した。^(四一) しかし、フランス共産党は、反ファシズム政策と、その独自の戦略思想(ソヴェト革命)を志向しての党独自の強化という二つのプランを混同しないように留意していた。

フランス共産党の行動様式は、きわめて経験的・実践的であった。理論的な説明は、党機関内では、きわめてまれにしか行なわれなかった。^(四二) しかも、トレーズの発言にはつねに、伝統的なボルシェヴィキ的テーマの伏在が発見された。フランス共産党の左翼政府支持政策は、人民戦線政府への参加をもふくめて、一九一七年のレーニンによる二重権力戦略のフランス版と考えられていた。^(四三) フランス共産党による最初のブルム政府不参加は、短期間での権力獲得の展望に位置づけられる政策と結びついていた。^(四四) 人民戦線委員会は、ソヴェトと同族体のもに発展するものと考えられていた。^(四五) 一九三六年の終りごろから、フランス共産党員は、ブルム政府の外部にただでなく、議会レヴェルでも、この政府を支持する左翼多数派の外

部に身をおきはじめた。そして、フランス共産党員は、労働者および社会主義の世論のレヴェルでは、左翼多数派の内部で新たな多数派を獲得するために、そのあらゆる努力を展開した。^(四六)フランス共産党がえがきつづけた、共産党の指揮する真の人民戦線政府こそ、当時におけるプロレタリア革命（ソヴェト革命）への移行と接近の真のフランス的形態であった。^(四七)

トレーズらフランス共産党のリーダーシップは、ブルジョア社会内での体制的政府には、不承認の原則をつらぬいた。フランス共産党の社会党にたいする敵意は、容易にぬぐいきれなかった。ブルム人民戦線政府にたいしても、フランス共産党のリーダーシップは、根底にその不信感をひそませていた。彼らは、ブルム政府が、階級協力政府であり、ブルジョア社会管理政府に墮しはしないかという疑念をつねに抱いていた。

一九三七年以降、情勢の急展開にともなうてブルム人民戦線政府への参加の意志を表明してからも、フランス共産党のリーダーシップは、それを独自の戦略に基づく戦術的コロラリーとして評価した。彼らは、ブルジョア社会の頭部に坐をすえて階級レヴェルや大衆レヴェルにたいして、人民戦線綱領を実現し、ひいてはフランス・ソヴェト綱領を宣伝する効果的なブレッシャー活動を行なおうと企図した。彼らは、ブルム政府への参加を、あくまで真の人民戦線政府（大衆の内閣）、ひいてはソヴェト政府実現の挺子として利用しようとして画策した。彼らは、政府参加の実績を媒介として、左翼多数派内の真の多数派となり、ひいてはソヴェト信奉者の少数派を多数派に転化させるための努力を行なおうとした。フランス共産党は、かなりの動揺と逡巡を重ねながら、プロレタリア革命とジャコバン主義の理想とを結合しようとして試みた。しかし、新ジャコバン主義の理論は、ついに誕生させることができなかった。^(四八)

- (一) 拙稿「コミンテルン第七回大会とコミンテルン・フランス支部」鹿兒島大学法文学部『法学論集』第四号、一九六八年二月参照。
- (二) コミンテルン第七回大会へのフランス共産党の貢献について Cf. V. Joannes, Le VII^e Congrès de l'Internationale Communiste, L'apport du Parti communiste français au Mouvement communiste international, Cahiers de l'Institut Maurice Thorez, N°13, 1969.
- (三) Cf. Victor Michaut, De l'expérience du Front populaire, Cahiers de l'Institut Maurice Thorez, N°2, Juillet-Septembre 1966, p. 9.
- (四) G. Dimitrov, L'offensive du fascisme et les tâches de l'Internationale communiste dans la lutte pour l'unité de la classe ouvrière contre le fascisme. Numéro spécial, IV. La Correspondance Internationale. N°70, 20 Août 1935. Feltrinelli Reprint, 1967, p. 1035. 邦訳「デミットロフ、坂井・村田訳」反ファシズム統一戦線「国民文庫」六三頁参照。
- (五) G. Dimitrov, o. c., p. 1041. 邦訳「九三頁参照。
- (六) Ib., p. 1041. 邦訳「九四頁参照。
- (七) Ib., p. 1041. 邦訳「九四—九六頁参照。
- (八) Cf. Extracts from the theses on tactics adopted by the fourth Comintern congress. The Communist International, 1919-1943. Documents. Vol. I, Oxford Univ. Press, 1956, p. 425. 邦訳「J. デグラス編」荒畑訳「コミンテルン・ドキュメント 一九一九—一九二二年 I」論争社「四〇四頁参照。なお、B・レイプソン、K・シリニャ、石堂訳「現代革命の理論—コミンテルンの政策転換—」合同出版、五三頁、一八〇頁、二二七—二二八頁参照。
- (九) Cf. Extracts from the theses on tactics adopted by the fifth Comintern congress. The Communist International, 1919-1943. Documents, Vol. II, Oxford Univ. Press, 1960, p. 152.
- (一〇) Cf. Extracts from the theses on tactics adopted by the fourth Comintern congress, op. cit., p. 427. 邦訳「四〇五

頁参照。

- (一一) G.Dimitrov, o.c., p.1041. 邦訳、九六頁参照。
- (一二) B・レイプゾン、K・シリニーヤ、前掲書、二二七頁参照。
- (一三) Cf.G.Dimitrov, o.c., pp.1041-1042. 邦訳、九六一—一〇〇頁参照。なお、B・レイプゾン、K・シリニーヤ、前掲書、二二八頁参照。
- (一四) G.Dimitrov, o.c., p.1042. 邦訳、一〇〇頁参照。
- (一五) デイミトロフ、坂井・村田訳「反ファシズム統一戦線」前掲書、一四六頁。
- (一六) B・レイプゾンとK・シリニーヤは、前掲書のなかで、つぎのようにのべている。「こうして第七回大会は、民主主義とその拡大のための闘争をつうじて社会主義革命に接近する可能性を基礎つけた。それは、あたらしい共産主義戦略の基礎の一つとなり、今日でもその生命力、現実性を保持する、もっとも大きな意義をもった結論であった。」「民主主義のための、ファシズムと戦争に反対するための闘争をつうじて社会主義へ—これがあたらしい共産主義戦略の主たる意味であった。」B・レイプゾン、K・シリニーヤ、前掲書、二二二—二二三頁参照。この評価は、国際情勢の推移を軽視した歴史的相対主義の批判を免れないであろう。
- (一七) G.Dimitrov, o.c., p.1042. 邦訳、一〇一—一〇二頁参照。
- (一八) デイミトロフ、前掲書、一四七頁参照。
- (一九) Cf.D.R.Brower, The New Jacobins, the French Communist Party and the Popular Front. Cornell Univ. Press. N.Y.1968. pp.95, 138. Cf.N.Greene, Crisis and decline, the French socialist party in the Popular Front era. Cornell Univ. Press. N.Y.1969. p.71.
- (二〇) M.Thorez, Les succès du front unique antifasciste. Oeuvres, L. II, t.9, p.136. 邦訳、フランス現代史研究会訳「トレーズ政治報告集」第一巻 人民戦線とその勝利、未來社、一三四頁参照。

- (一一) Cf. M. Perrot et A. Kriegel, *Le Socialisme français et le pouvoir*. EDI Paris. 1966. p. 122.
- (一二) M. Thorez, *Pour la cause du peuple*. OEuvres, L. II, t. 10, p. 41.
- (一三) Cf. M. Perrot et A. Kriegel, o. c., p. 126.
- (一四) Ve congrès national du P. C. F., *Compte rendu sténog.*, p. 44, cité dans M. Perrot et A. Kriegel, o. c., pp. 126-127.
- (一五) M. Thorez, *L'Union de la nation française*. OEuvres, L. III, t. 11, p. 105. 邦訳『前掲書』二四四—二四五頁参照。
- (一六) M. Thorez, *Le Bilan du VIII^e Congrès du Parti communiste*. OEuvres, L. III, t. 11, p. 165.
- (一七) M. Thorez, *Quinze années de lutte pour le pain, la liberté et la paix*. OEuvres, L. II, t. 10, p. 162.
- (一八) Cf. M. Perrot et A. Kriegel, o. c., p. 128.
- (一九) Cf. D. R. Brower, op. cit., p. 134.
- (二〇) M. Thorez, *Les succès du front unique antifasciste*, o. c., pp. 134-135. 邦訳『前掲書』一三二—一三三頁参照。
- (二一) Cf. M. Thorez, *Le Bilan du VIII^e Congrès du Parti communiste*, o. c., p. 165.
- (二二) M. Thorez, *L'Union de la nation française*, o. c., pp. 105-106. 邦訳『前掲書』二四五頁参照。この支持声明は、一九三五年六月五日、左翼代表部所属の共産党員グループの代表によつて行なわれた宣言である。
- (二三) J. Duclos, *L'unité pour la victoire*, p. 6, cité dans M. Perrot et A. Kriegel, o. c., p. 129.
- (二四) Cf. *Cahiers du bolchevisme*, 15 février 1936, p. 293, cité dans M. Perrot et A. Kriegel, o. c., pp. 129-130.
- (二五) M. Thorez, *La position du Parti communiste après la victoire du Front populaire*. OEuvres, L. III, t. 11, p. 224.
- (二六) M. Thorez, *Fils du peuple*, 2^e éd. Paris, p. 121. 邦訳「人民の子」日本共産党中央委員会出版部、一一二頁参照。なお、Cf. D. R. Brower, op. cit., pp. 140-141.
- (二七) J. Duclos, *Témoignage sur les origines et la victoire du front populaire*. *Cahiers de l'Institut Maurice Thorez*. No 2. Juillet-Septembre 1966. pp. 18-19. フランスの雑誌『デモクラシー・ヌヴェール』が人民戦線三〇周年を記念して企画

した人民戦線の教訓に関する討論会で、デュクロは同じ内容の発言をしている。デュクロは、司会者ノワロ (Paul Noirot) の質問に、つぎのように答えている。「内閣参加の問題は、われわれの前にはじめて提起された。そして、きわめて当然のことだが、われわれの陣営内には黙殺する態度があった。モーリス・トレーズは、参加のテーゼを擁護した。私は、自分自身が納得しなかったので、そのテーゼを支持しなかった。しかし私は、この問題では、モーリス・トレーズが正しかったといふことをやがて理解するようになった。」Les leçons du front populaire. 1936-1966. trentième anniversaire. Démocratie Nouvelle. 5. 1966. p. 43. ノラシモンも、当時を回顧して、一九五六年四月五日号の『ユミニテ』紙で、つぎのように述べている。「党ヴェルでは議論をれなかつた—この問題はまた熟していなかつた—が指導部では議論されていたこれらの問題のうちの一つは、人民戦線政府への参加問題であった。モーリスは賛成であった。私は反対であった。そして反対したのは私だけではなかつた。」Cf. Ph. Fuchsman, Madame Kriegel bouleverse l'histoire. Cahiers du communisme. 2-1968. p. 109.

- (三八) J. Duclos, Le front populaire, expression de l'alliance entre la classe ouvrière, la paysannerie laborieuse et les classes moyennes des villes. Cahiers de l'Institut Maurice Thorez. Octobre 1966-Mars 1967. N° Spécial 3 et 4. pp. 82-83.

(三九) Les leçons du front populaire. Démocratie Nouvelle. o. c., p. 43.

(四〇) Cf. Ph. Fuchsman, o. c., p. 109.

(四一) Cf. M. Perrot et A. Kriegel, o. c., pp. 131-132.

(四二) Cf. L. Bodin, Le parti communiste dans le Front populaire. Esprit. Octobre. 1966. p. 441.

(四三) Cf. M. Perrot et A. Kriegel, o. c., p. 134.

(四四) Cf. A. Kriegel, Léon Blum et le Parti communiste. (Communication) dans Actes du colloque. Léon Blum, chef de Gouvernement 1936-1937. Cahiers de la fondation nationale des sciences politiques. n° 156. Armand Colin. p. 130. しかし、この報告のなかで、クリージュルが、一九三六年春の情勢を革命情勢と認定したうえで、いくつかの歴史的仮定

を立ててゐるのは大きな誤りであらう。 Cf. Ib., pp. 126, 128.

(四五) Cf. A. Kriegel, o. c., p. 134.

(四六) Cf. M. Perrot et A. Kriegel, o. c., pp. 135-136.

(四七)

事実トレーズは、一九三七年一二月下旬に開かれた、フランス共産党第九回大会の席上で、つぎのようにのべている。「人民戦線を前進させ、人民戦線綱領を厳格にしかも急速に適用するための第一条件に関して、われわれはつぎのことをつげくわえるべきである。すなわち、共産党員は、最近の内閣の危機のさいにそういつたように、真の人民戦線政府、人民戦線のイメージに適合して形成される政府で、自分らの責任を分担する用意があるところである。」M. Thorez, *La France du Front popu-laire et sa mission dans le monde*, OEuvres, L. III, t. 14, p. 281. 邦訳、前掲書、三六二—三六三頁参照。

(四八) Cf. D. R. Brower, op. cit., pp. 246-247.

本稿は、昭和四十三年度および昭和四十四年度文部省科学研究費一般研究D『フランス現代政治史の基礎的研究—人民戦線期を中心として—』による研究成果の一部である。